

聖書日課 『からし種』 2023.6.25-7.2

<p>6月25日 (日) II 列王 23章</p>	<p>「ヨシヤは、『あそこに見える石碑は何か』と言った。町の人々は、『神の人の墓です。この人はユダから来て、あなたがベテルの祭壇になされたことを予告しました』と答えたので」(17節)。I 列王13章で、神の召命を果たしたのに預言者仲間に欺かれ、死んでしまった神の人。長い時を経て、予告された本人ヨシヤ王を感動させる働きに再び用いられた。</p>
<p>26日 (月) II 列王 24章</p>	<p>「主が告げられたとおり、バビロンの王は主の神殿の宝物と王宮の宝物をことごとく運び出し、イスラエルの王ソロモンが主の聖所のために造った金の器をことごとく切り刻んだ」(13節)。主は「いつ」これを告げられたのか、ソロモンの時かヒゼキヤの時か。いや、栄える時も落ちて行く間も常に告げられていたのに、わたしたちが聞いていなかったのではないか。</p>
<p>27日 (火) II 列王 25章</p>	<p>「カルデア人は主の神殿の青銅の柱、台車、主の神殿にあった青銅の『海』を砕いて、その青銅をバビロンへ運び去り、壺、十能、芯切り鋏、柄杓など、祭儀用の青銅の器をことごとく奪い取った」(13~14節)。エルサレム陥落の痛みを受けたのは神の民のみならず、御自身の名を置かれた神殿が侵され壊され奪われるのを見つめられる神も同じであろう。</p>
<p>28日 (水) I 歴代 1章</p>	<p>「アダム、セト、エノシュ」(1節)。他のどの民よりも貧弱であったイスラエル(申命7:7)を用いて成された神のみわざの歴史を記す最初の一節。神に造られた最初の名「アダム」を記す時、著者が抱いた想いはいかばかりか。人の系図は大洪水の中を生きられたノアへと続き、彼の息子セム、ハム、ヤフェトから、実に多様な種族、民族、家族へと広がってゆく。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.6.25-7.2

<p>29日 (木)</p> <p>I 歴代 2章</p>	<p>「ラムにはアミナダブが生まれ、アミナダブにはナフションが生まれ、彼はユダ族の首長となった。ナフションにはサルマが生まれ、サルマにはボアズが生まれ、ボアズにはオベドが生まれ、オベドにはエッサイが生まれ」(10～12節)。マタイ福音書の1:4～5がこれによく似ている。福音記者は、キリストへ至る歴代誌を書かずにはおれなかったのだろう。</p>
<p>30日 (金)</p> <p>I 歴代 3章</p>	<p>「ヨシヤの子は、長男ヨハナン、次男ヨヤキム、三男ゼデキヤ、四男シャルム」(15節)。「主の目にかなう正しいことを行い、右にも左にもそれなかった(II 列王22:2)」と記されるヨシヤ王だが、息子たちはエジプトやバビロンという強国に翻弄された。しかし、主はバビロンの捕虜になったヨヤキムの子エコンヤ(16～17節)を用いてキリストまでの系図を続けられた。</p>
<p>7月1日 (土)</p> <p>I 歴代 4章</p>	<p>「ユダの子シェラの子孫は...王の近くにとどまって王の仕事に従事した」(21～23節)。ユダの最初の妻との三男シェラは、ユダの身勝手により兄嫁タマルと結婚できず、ダビデ王に至る系図から外されてしまった(創38章)。しかし神の見守る目からは外されることなく、何代も後の子孫が「王家御用達」の職人として用いられ、王の近くで生きる道を与えられた。</p>
<p>2日 (日)</p> <p>I 歴代 5章</p>	<p>「ルベンが長男であったが、父の寝床を汚したので、長子の権利を同じイスラエルの子ヨセフの子孫に譲らねばならなかった」(1節)。創世記はルベンが弟ヨセフや父ヤコブを想う優しい兄であったことを記す一方、彼の「恥ずかしい罪」もしっかり記している。神の前に「恥ずかしい罪だらけ」の「わたし」のために、イエス・キリストは真実の愛を携えて来てくださった。</p>